



Title	経路を表わす前置詞句について
Author(s)	上野, 義和
Citation	大阪外大英米研究, 9, p. 113-124
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99014
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

経路を表わす前置詞句について

上 野 義 和

序

英語には、‘across’ や ‘over’ のように、同形で前置詞にも副詞にも用いられる一群の語がある。これらの語が、移動や往来の運動を示す動詞と結びついて、移動の際の経路を表わす時、深いレベルにおいて前置詞としての機能をもっており、表面的には副詞として機能しているようにみえるものでも、実は、そのような、経路を示す前置詞が支配する NP が delete された結果にしかすぎない、という考え方を述べるのが本稿の目的である。

J.S. Gruber^①によれば、以下の 3 つの文は、ほぼ同義である。^②

- (1) The pencil pierced the cushion.
- (2) The pencil pierced through the cushion.
- (3) The pencil went through the cushion.

‘cushion’ の位置に生じうる形態素の種類も同じである。(1)、(2)、(3)の 3 つの文は、言い替えの関係 (paraphrase relation) にあるとみなすのである。 「言い替え」とは、いったい、どのような概念をさすのか。『新言語学辞典』の ‘paraphrase’ の項には、次のような記載がみられる。 「同一言語において、意味を変えることなく、A の表現を B の表現に変形することを、言い替えという。また、A の表現と B の表現とが同じ意味であるとき、A と B との間には、

① 安井 稔編『新言語学辞典』研究社(東京)1971の‘Incorporation’、‘Paraphrase’、‘Synonymy’などの項参照。

② 同義性に関する定義は多いが、たとえば、G. Leech は次のように定義している。
(Semantics, Penguin Books Ltd, 1974, pp.85-86)

X is synonymous with Y
X has the same truth value as Y,
i.e. if X is true, Y is true and vice versa; also if X is
false, Y is false and vice versa.

言い替えの関係 (paraphrase relation) があるとか、A と B は、相互の完全な言い替え (full paraphrase of each other) である、ともいいうことがある。」

ここで使用されている「意味」は「情的意味 (emotive meaning)^①」ではなくて「知的意味 (cognitive meaning)^②」のことを指している、と考えられる。上記の定義の中には、「意味を変えることなく」という条件がつけられている。この条件は、変形 (transformation) は意味を変えない、ということが前提になっている。変形は意味を変えない、という立場に立つと、「言い替え」の概念は、二つ又はそれ以上の文が、同一の深層構造をもつものであって、その表層構造における違いは、何らかの変形操作によるものであるならば、それらの文は「言い替え」の関係にある、ということを意味しているものである。^③

しかしながら、このような考え方では、すべての「言い替え」による現象が説明されるわけではない。たとえば、次のように converseness (逆語性) を利用した表現もその例証になりうる。

(4) Harry bought a book from Max for \$5.

(5) Max sold a book to Harry for \$5.

(4)、(5)の二つの文は、「言い替え」の関係にあると考えられるが、これらの文は、たとえば、John gave Bill a book と、それに受身変形を適用して生み出される Bill was given a book by Johnとの間ににおけるような、同一の深層構造をもっているものとは考えられない。さらに、(4)、(5)は次のような表現とも深い意味的なつながりをもっている。

(6) Harry paid \$5 to Max for a book.

R.S. Jackendoffは、意味解釈理論と語い論的立場 (lexical position) を基

① Leech (pp.10-27) によれば、associative meaning にあたるものであろう。

② Leech (pp.10-27) はconceptual meaning とか denotative meaning 又単にsenseと呼んだりしているが、いずれにせよ linguistic communication において中心的要素と一般に考えられているもの、としている。

③ 解釈意味論の立場に立てば、同じ深層構造をもつ文がすべて同じ意味をもつのではない、といふことになる。 Leech, p.329.

盤にして、「Thematic relation」によって、(4)、(5)、(6)の3つの文の意味関係を説明しようとする。^①(4)、(5)においては、Theme(book) が Source(Max) から Goal(Harry) に移動する。同様に、Secondary theme(\$5)が Source から Goal に移動する。(6)では Themeは \$5 で、bookは Secondary Theme になる。このように、Theme の移動、という考え方によって、同一の意味関係や構文上の共通性を説明しようとするのである。

(1)、(2)、(3)の3つの文に戻ってみる。これらの文は、ある面では同義ではない、とも考えられる。何故かといえば、これらの文中で使われている動詞 'go' と 'pierce' との間には、ある意味特性の差異が存在するからである。

(7) The car went through the tunnel.

は well-formed (文法的) な文であるが、他方は ill-formed (非文法的)

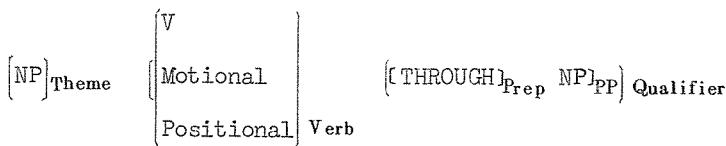
(8)*The car pierced the tunnel.

である。しかしながら、これら個々の語い項目がもつ独自の意味特性の違いをとりさって考えてみれば、(1)、(2)、(3)の3つの文は、いずれも 'Theme(pencil)' が through+NP ((1)の場合には NP のみ) で示される位置を移動した、という同一の意味関係を表わしていることになる。言葉をかえて言えば、pencil 又は普通の場合には、その先の部分が cushion の一方の側から、その内部を経由して他方の側へ通りぬけたことを表わしている。従って through は経路を表わす前置詞であると考えられる。この点において、3つの文は同義であると言うことが出来る。

Gruber^②は、このような意味論的、構文論的類似性を説明するために、「語い前の構造 (prelexical structure)」という考え方を導入する。互いに「語い替え」の関係にある 2 つ又はそれ以上の構文は、同じ「語い前の構造」をもつものであると考えれば、(1)、(2)、(3)の3つの文は、語い前の構造においては、いずれも下記のごとき構造をもっていることになる。

① Semantic Interpretation in Generative Grammar, MIT press,
1972.

② 『新言語学辞典』の 'Prelexical structure' の項参照。



そして、語い目録 (lexicon) では、「/go/ は Motional に生ずる」という
 ような記載がある。'pierce' に関しても同様に、「/pierce/ は Motional
 (THROUGH) に生ずる、と記載されている。'THROUGH' の編入 (Incorporation)
 は随意的 (optional) で 'pierce' に編入されるかされないかで、(1) 又は (2) の
 文が生み出されるのである。

 II

‘cross’ という動詞について考えてみる。

(9) Robert crossed the street.

は文法的な文であるが、他方

(10) *Robert crossed across the street.

のような文は生み出されない。これは、語い目録では、/cross/: Motional
 ACROSS Positional と記載されているからである。次のような文は、(9) と同様文法的である。

(11) Dave crossed the street.

次に、(1)、(2)、(3)の場合と同様に、‘Motional, Positional’ という特性を
 もつ動詞を (1) の ‘cross’ の位置に挿入すれば、次のような文が生み出される。

(12) Dave went across the street.

(1) 及び (2) の文は、構文論上、意味論上の類似性をもっていることになる。即ち、
 同義性をもつてゐるのである。‘go’ 及び ‘cross’ は両者とも、通りの一方の
 側から他方の側への Agent (Dave) の移動を表わす、いわゆる移動動詞

(motional verb) である。(1)の動詞 ‘cross’ の語い目録における ‘ACROSS’ 及び(2)で使われている ‘across’ は「位置の移動」という意味特性をもつ動詞と結びつく前置詞である。

(13) Dave went across the bridge.

この(3)において前置詞 ‘across’ の支配する NP(the bridge)は、表面的には(2)の ‘across’ の支配する NP(the street)と同じ位置に生じているため、それと同じ働きをしているように見える。しかしながら、‘across’ なる前置詞は、本来 ‘on, in’ + cross ‘cross’ であって、‘on or in a cross(十字に)’ とか ‘in the manner of a cross(十字を描くように)’ という原義をもつ。従って、次のような表現も可能である。

(14) Dave went across the river along the bridge.

この文は、‘across’ の原義、又はその中心的意味を生かした表現であって、‘across’ の支配する NP(the river) とその後に続く前置詞 ‘along’ が削除されて(3)の表現が生み出された、と考えることが出来る。

次に、(14)における ‘across the river’ と ‘along the bridge’ はどのような働きをしているかを考えてみたい。「橋をつかって川を渡る」の意であるから、「手段」を示す表現であるようになれる。まず次の文をみてみよう。

(15)* The bridge went across the river.

は非文法的である。一方、次の文は文法的である。

(16) Dave went across the river along the bridge by the car.

C.J. Fillmore によれば、The door opened. The janitor opened the door. The janitor opened the door with this key. The janitor used this key to open the door. This key opened the door. などの構文における ‘the door’, ‘the janitor’, ‘this key’ は動詞 ‘open’ に對

① 日下部徳次『前置詞』(上)英文法シリーズ 研究社(東京)1971 p.24.

して一定の関係にあるという。^①これらの構文は、言い替えの関係にある、とみることが出来る。^⑩における‘by the car’は上記の‘with this key’と同じく「手段を表わす格 (instrumental case)」として機能していると思われる。^②次のような言い替えが可能であるからである。

(17) The car went across the river along the bridge.

(18) Dave used the car to go across the river along the bridge.

のような表現は可能ではないから‘along the bridge’も‘across the river’も、いずれも手段を表わすものではない。川を渡る場合には、実際に橋を通って他方の岸へ行くわけだから、‘along’及び‘across’は、いずれも、Theme又はAgentがある地点から他の地点へ移動を行う際の経路(passage)を示す前置詞であるとみなすことが出来る。従って、これまで述べてきたことから、次のような規則をたてることが出来よう。

V motion₁
position₁ ACROSS NP₁ P NP₂ →
V motion₁
position₁ ACROSS (NP₁ P) NP₂

ただし、Pは経路を表わす前置詞。

位置の移動を表わす「移動動詞」と結びついて経路を表わす前置詞の一つに‘over’がある。

(19) John sailed over the ocean.

移動を表わす動詞と経路を表わす前置詞が結びつけば、当然、起点を表わす前置詞句と到着点を示す前置詞句をつけ加えることが出来る。

① Fillmore の諸論文以外に D.G.Lockwood, Introduction to Stratification Linguistics, Harcourt Brace Jovanovich, Inc. 1972, p.136 以下にくわしい。

② Fillmore は手段を表わす格はwithを伴うと言うが、それ以外にも、この場合のように、byを伴うこともあることは言うまでもない。

③ R.Quirk, S.Greenbaum, G.Leech, J.Svartvik, A Grammar of Contemporary English, Longman Group Ltd., 1972, pp.297-315.

- (20) John sailed over the ocean to U.S.A. from
England.

(13)、(14)について述べたことと同様に、この(20)においても、経路を表わす前置詞句の中の NP を消去することが出来る。

- (21) John sailed over to U.S.A. from England.

ただし、起点及び到達点を表わす前置詞句の中の NP を消去することは出来ない。

- (22)*John sailed over to.

- (23)*John sailed over from.

これまで述べた 'across'、'along'、'over'、'though' 以外に、経路を表わす前置詞として、'beyond'、'down'、'past'、'round'、'up' などがある。前置詞 'at' が経路を表わすことがある。次の文がそうである。

- (24) Johnny entered at the front door.

しかし、次のように経路を表わす前置詞の後の NP を delete することは出来ない。

- (25)*He entered at.

一方、(19)からは次の文を導くことが出来る。

- (26) John sailed over.

(20)が文法的で、(26)が非文法的である理由は、丁度、

- (27) John came with us.

が文法的で、

- (28)*John came with.

が非文法的であるのと同じで、'at' も 'with' も、'over' などと違って、前置詞として使われる場合と同形のままで副詞として機能することがないからである。^① ただ、(20)におけるような 'over' を前置詞とみなすか、それとも副詞としてみなすか、という問題が生じてくる。前置詞として働く場合には、その

① Leech(pp.185-201).

後に NP が存在するが、例におけるような場合には、その NP が存在しないために、表面的には副詞にみえるものが、実はもっと深い層においては前置詞として機能しているのではないか、と考えられるのである。この種の語に関して、従来、たとえば、G.O.Curme^①やA.G.Kennedy^②が ‘Prepositional adverb’ (副詞的前置詞) と名付けたり、H.E.Palmer^③が ‘Adverbial particle’ (副詞辞) と呼んだり、文法家によって名称が違っているが、これまで述べたように、層というものを考えることによって一応の説明がつくのではないか、と思われる。これらの語に関して、『前置詞』(下)^④には次のような記述がみられる。

「……これらの語を前置詞とか副詞とかに峻別して、違った品詞名を与えることのみでは、この語の本質に悖るのではないかと思う。これら一群の語は…文法上あるいは意味上、前置詞にも副詞にも用いられる語である。そして常に両面の性質をもっていて、たとえ一方に用いられても、常に他方を含蓄している。それゆえ、普通の副詞のように、限定的(Attributively)動詞などを修飾するだけのものではなく、また普通の前置詞のように(代)名詞を支配するだけのものでもない。これらの語は関係 (relation)を示す副詞であり、動詞を修飾する前置詞だと言うことができる。」

以上述べてきたことをまとめてみると、同形で前置詞にも副詞にも用いられる一群の語が移動動詞と結びついて、移動の経路を表わす時、深い層においては前置詞として機能しており、表面的な層においては、それらが支配する NP が delete されないままで、 delete された形でもあらわれうる、ということになる。すなわち

PP → P — (NP)

経路を表わす前置詞と共に起しうる動詞を調べてみれば、 ‘come’ , ‘go’ , ‘flow’ , ‘fly’ , ‘walk’ , ‘amble’ , ‘trot’ , ‘canter’ , ‘gallop’ , ‘travel’ , ‘spread’ ,

① Syntax, Heath(Boston), 1931, p.569f.

② Current English, Ginn(Boston), 1935, p.297.

③ A Grammar of Spoken English, Heffer(Cambridge), 1924, p.181.

④ 小西友七著、英文法シリーズ、研究社(東京) 1970 p.81.

‘sail’ , ‘drive’ , ‘ride’ , ‘run’ , ‘return’ , ‘rise’ , ‘fall’ , ‘drop’ , ‘carry’ , ‘take’ , ‘bring’ , ‘roll’ , ‘transfer’ , ‘move’ , ‘pierce’ , ‘jump’ , ‘swim’ , ‘convey’ , ‘transport’ , ‘stroll’ , ‘throw’ など、やはり往来、移動を表わす動詞がみい出される。①

III

‘over there’ という表現がある。これは

(29) They drove over to the village.

における到着点をあらわす前置詞句を *there* で言いえた場合にえられるものである。

(30) They drove over there.

‘over there’ 以外に、‘up there’ , ‘down here’ , ‘around here’ などの表現が、状態を表わす動詞と結びつくことがある。たとえば、

(31) A store is over there.

このような場合においても、‘over’ は経路を表わす前置詞として、深い層では NP を従えていたのではないか。そう考えれば、当然移動を表わす動詞もそれに伴っていたのではないか、と考えられる。即ち、

(32) A store is (you will go) over there.

のような表現が考えられる。又、a store は移動した際の到達点と考えられるので、

(33) You will go over to a store there.

のごとき構造があるのではないかと思われる。即ち、ある起点からある経路を通って別の場所へ移動すれば、そこには店がある、と考えるのである。言い方をかえれば、表面的には‘over’ の中に移動の概念が copy されているとも言

① これらの移動動詞は、‘go’ 又は ‘come’ と統語関係をもつことが可能である。

I am flying to Europe.---I am going to Europe by air.

I am driving to Nagoya.---I am going to Nagoya by car.

える。^① 'lands over there' のような表現も同じように考えてみればどうであろうか。移動や往来を表わす動詞と共に起しうる前置詞は、これまでのところ、次のような意味をもって機能することがはっきりしている。

(1) 起 点

(2) 経 路

(3) 到着点

『前置詞』(下)^②には、「over」について次のような記述がみられる。

(a) 「over」は、その一方より他方に通過する意を示す。この場合、

○その表面を接触して通過するときと、

○接触しないで通過する場合とがある。

(b) 通過した向う側を意味する。

(a)は要するに、経路を示すと考えられるが、問題は(b)である。(b)の具体例として、「lands over the sea」が挙げられている。この「over」は、一見したところでは、(b)のごとき意味を含んでいるようにみえるが、「over」は経路を示すNP(the sea)を直接支配しているわけであって、「向う側」という意味は「lands」に関するものではなかろうか。「over」は、やはり、海(the sea)を経路と(又は経由)して、の意味を表わしているのではないか、と思われる。さらに、「通過した」という表現自体が、AgentやThemeの移動を表わす動詞が、この種の表現の背後(又は深層)に存在していることを暗示するものではないだろうか。このように、経路を表わす「over」が、通過した後の位置を表わしているようにみえるのは、(31)、(35)、(36)、(37)の各々の文が示しているように、それがbe動詞をはじめとする「stand」などの状態や位置(時には同一地点での運動)を表わす動詞(逆に言えば、AgentやThemeなどの移動、往来を表わさない動詞)と共に起ることがよくある、ということが大きな原因の

① A. S. Hornby, A Guide to Pattern and Usage in English(岩崎民平訳『英語の型と正用法』研究社、1968, pp. 281-283.)における Away with them! (Take them away!)や Along with you! (Get out along!)などの'away'や'along'も同じように考えられる。

② p. 82参照。

一つであるように思われる。さらに、‘over the sea’は表面的には‘lands’というNPと強いつながりがあることも又一つの原因であるように思える。この‘lands over the sea’は、‘lands which are over the sea’←‘lands are over the sea’という派生の歴史をもつと考えられうるものであろうから、結局(31)と同じ構造になり、従ってこの背後(又はより深い層)には、(32)、(33)で示されたような移動動詞が、ひそかに存在しているのではなかろうか、と考えられるのである。‘lands are (you will sail) over the sea’と考えれば、‘over the sea’は、まさしく移動の経路を表わし、‘lands’がその到達点を示すものである、ということになる。又、次の構文も同様に考える。

(34) It is cooler here than down there.

‘down’や‘up’には実際の上下関係でなく、ただ単に‘along’や‘through’と同じ意味で使われ^①たとえば、‘go down (又はup) the street’と言えば、「通りを通って行く(又は、来る)」ことで、運動の経路を表わすことがある。従って、この‘down there’にも移動・往来を示す動詞が、より深い層において関係していると考えれば、‘here’は起点を、‘down’は経路を、‘there’は到達点を表わしている、と言えるのである。さらに次の文をみてみよう。

(35) The post office is just across from the station.

(郵便局は駅のまん前です)

‘from the station’は起点を表わし、‘the post office’は到着点を示している、と考えられる。次の(36)におけるように、経路を具体的に述べたままでしておくこともできる。

(36) The post office is just across the street from
the station.

① 『前置詞』の(上)pp. 78-79及び(下)pp. 133-134及びA Grammar of Contemporary English (pp. 297-315)を参照。

(36) では ‘the street’ とあるが、経路を示す NP であればその代りに、たとえば、 ‘the road’ でも ‘the path’ でもよいのであって、いずれにせよ、何かが移動する際の経路を示す NP が元々存在しており、それが delete されて (35) の構文が生れてきた、と考えるのである。次の文における末尾の前置詞句は移動・往来の到達点と考えられる。

(37) The house is over against^① the church.
(家は教会の向いだ)

IV

以上述べてきたことは、あくまでもこうではなかろうか、といふいわば試案のようなものであって、もっと精密な理論のわく組みの中で論じなければならないことであろう。又、 I read through the book ↔ I read the book though におけるような前置詞の位置の問題や I am through the work は I have finished the work と同じような意味をもっているから ‘through’ は「終了」の意をもっている、という見方に対して、 ‘through’ はあくまでも、仕事 (the work) のやり始め (起点) と終了 (到達点) との間の経路を表わすのだ、と考える時、 Agent や Theme が実際に物理的な移動や往来を表わすのではなく、もっと抽象的な意味での移動、というような考え方もすることが出来るという問題など、あわせて考えてみなければならないことが多い。

(32), (33) におけるように、深い層に移動動詞を認め、それを変形操作によって delete すれば、 (31) が生み出されると考えた (それをうらづける justification がもっと必要であろう) が、このような変形は ‘ad hoc’ な色彩が濃いかもしない。これまで述べてきた現象は、むしろ意味分野で処理されるべき問題であるかもしれない。このことについては、稿を改めることにする。

① 『前置詞』(上) p.28 によれば、原義は運動を表わす動詞と共に用いられて、「～の方へ」である。従って、今日でも、或るものに向っての衝突の意をもつ。